

艦娘アパート

リバプールおじさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深海棲艦が暴れて嫌になつてゐる世界ではない艦隊のお話。

主人公補正なんて何にもない一般人がたった1人で立ち向かうのは化け物よりも化け物な人間だった。

目次

第1章 孤児院潜入編

第1話	28歳、疑念を持つ	1
第2話	28歳、少女と張り込み	6
をする		
第3話	誰だよお前	16
第4話	28歳、忠告をする	21
第5話	28歳、不貞寝を決め込	26
第6話	嫌いじゃないぞ	33
第7話	己と人の天秤	39
第8話	28歳、中年になる	48
第9話	28歳、希望を絶たれ	55
策を講じろ、足		
第10話		62
掻け止まるな		
第11話	最後の秘策	70
因果応報		
第12話		77
第13話	28歳、報いる方	
法		
第14話	話は弾むが相性は悪	

い	第15話	28歳、2人で外出す	81	第20話	閃光	112
				最終章		
				第21話	話を蹴るか話者を蹴る	
				か		
	番外編	昔の事	91	第22話	みんなの事	121
	第2章	ブラック・バイト編				117
	第16話	バイトの求人には気を				
	つける		95			
	第17話	28歳、友人を呼ぶ				
	99					
	第18話	浅田君の属性はSM両				
	用だったりする。		103			
	第19話	誘ったのは相手だから				
	ツケろ		107			

第1章

孤児院潜入編

第1話

28歳、疑念を持つ

俺は浅田 幸治郎。 昨年の夏に他界した親父の跡を継いでポロアパートの管理人をしている。

だがシャレにならないほどにポロアパートなので住人が誰もいない。10室ある2階建てなのに。

だがそれならとつくに二束三文で売り飛ばしている。

なのに何故手放さないか。

それはその一室に俺の仕事場があるからだ。

俺の仕事は探偵。

と言ってもシャーロック・ホームズや蝶ネクタイの小学生の如く難解な事件を鮮やかに解決する様な探偵ではない。

浮気とか相続とか身内の相談とかを受け入れる民間人向けの探偵だ。その事務所をアパートの1階の一室に構えている。依頼は結構あり月に20件ほどだが1人で間に合う程の仕事なので仕事は1人だけだ。

と言ってもこのアパートから少し離れた家でも1人だが。

一人っ子だし母は生まれた時に難産で他界したし父は前述の通りだ。

だが1月に1度ほど、そうではなくなる日がある。

俺の事務所に時々艦娘が現れるのだ。

艦娘というのとは知っている。自分はやっていないので詳しいことは分からないが艦

隊これくしょんとかいうブラウザゲームに出てくるキャラクターたちの総称だ。

勿論このゲームは想像の産物であり画面の向こうの世界なはずなのだが。

そのこの住人である彼女たちが時々なんの前触れもなしに現れる。

まるで梅雨に雨が降ることの様に当たり前に。

1度病院で検査したことがある。探偵が頭をやられてしまったとあればすぐに事務所を畳まねばならない。結果は正常だった。

そして狂った様に出てくる娘達の史実での進水日（誕生日の様なものらしい）や轟沈日（反対に命日の様なものらしい）を調べたことがある。全く関連性を見出せなかった。

塩の満ち引きに関係でもあるのかと思いい番近い海岸の干潮、満潮時刻も調べた。全く不規則だった。

もうこうなつては諦めるより他はない。誰か1人くるたびに警察に頼んで孤児院に送ってもらうことにした。ちょうど最近国立の孤児院が隣町にできたのでそこに入っ

てもらったそうだ。

後悔はない。そんなよくいる主人公の様に同棲だなんて俺にはコミュニケーション的な問題でもできないし金銭面だってそんな養えない。

そんな28歳、独身、童貞の冴えない男の春。

今日は買い出しの日だ。浮気調査の為の盗聴器を買いに隣町の電気屋に行った。そういえばこの街であの娘達は生活してるんだな……。

そう思い行きがてらのコンビニで夕飯用のおにぎり3個を買う。

時刻は午後5時。いくら日が伸びたと行ってももうこの時間になるとあまり外出は控えなくなる時間だ。

そろそろ帰ろう。そう思い駅に向かう。

駅員『お急ぎのところ大変申し訳ありません。この電車は、隣の駅で起きた人身事故の影響で1時間ほど運転を見合わせさせていただきます』

まじか。

運転見合わせは遅れるのは勿論その動き始めた後の電車が尋常じゃなく混んでいる。こんな時だけ全人類の人口が3割ほど減ってくれればいいのにと切に願う。

ドアの窓に叩きつけられる。顔から。脚もあらぬ方に曲がっている。半ば強制的に夜の街を見せつけられる。そういやあの孤児院もこの沿線だったな……。

駅員『まもなく、○○、○○、お出口は右側です』

そんな音声と共にブレーキがかけられていく。

減速する視界の中に1つの灯りが漏れる大きな建物があった。

その例の孤児院だ。

そしてその光の中に認めた。いや、認めてしまった。

1人の女の子を殴りつける男の姿。

その後、駅に降りる人にもみくちやにされても感覚が戻らなかった。

戻ったのは最寄り駅に着く直前だった。

フラフラになりながら家にたどり着き盗聴器を置いて椅子に座り込むと大きなため息を吐く。

あの女の子は？ 艦娘？ 俺が？ 送った娘？ あの男は職員？ どの？ あの孤児院の？

あそこの孤児院はまさか。

あの孤児院は何か秘密がある。そんなちっぽけな疑念があんなにも大きくなるなんて思いもしなかった。

第2話 28歳、少女と張り込みをする

盗聴器を依頼主の女性に渡した後に俺は自宅の使われていないもう一つの布団を引つ張り出した。

いつも使わない布団だ。だが時々使うときがある。

そう、艦娘がやって来たときだ。だいたい彼女たちが俺の家に現れるのが仕事終わりの深夜だったため彼女たちに布団を貸し、次の日の朝に警察に突き出すと言った感じの生活サイクルを繰り返している。

彼女たちがいた短い時を思い出してシーツを握りしめた。あの娘達は確かにここに居たんだ。ただ俺が送ってしまったんだろうか。

いや、断言は出来ない。そうだ。もしかしたらただの見間違いかもしれない。そうだ。もしかしたら俺の見間違いかもしれない。

そう思い事務所に向かう。そろそろ今日は後片付けをしよう。そう思いボロアパーのドアを開ける。

瑞鳳「ん？あなたがここの家の人？瑞鳳と言います」

浅田「……またか」

散らかりきった部屋の中にいたのはセミロングの茶色の髪を一房ポニーテールに纏めて紅白のハチマキと同じ模様の髪縛りをした女の子。

服装は赤く縁取られた白い弓道着を着て少し大きめの弓道着を薄水色の紐で結っている。

そして少し小柄だ。全体的に新米の巫女さんと言ったところか。非常に可愛らしい。

瑞鳳「大丈夫？どうかしたの？」

浅田「ああ、いや、なんでもないよ」

そう言いながらも頭はフル回転していた。

この娘をどうするか。

またあの孤児院に置いてきてもらってしまおうか。

今俺が養ったとしてもカツカツだ。育てる自信がない。

そうだ、まだ決まったわけじゃないじゃないか。そうだよ今まで通り俺は送ればいいんだ。

本当に？心のどこかが叫び出す。

でも、もしかしたら、かもしれない。こう言う言葉に探偵という種族は弱い。

浅田「……俺の家来るか？」

瑞鳳「え？行つていいの？」

浅田「構わん、ただし！条件がある」

瑞鳳「……何？」

途端に顔がこわばつた。確かにこんな怖い顔してる男にそんなこと言われたら怖いだろうな……。

浅田「俺の家の家事を手伝つてもらおう」

瑞鳳「……え？そんな事でいいの？」

浅田「そんな事とはなんだ、俺は家事がからつきしだからな。非常に大切だぞ」

瑞鳳「……うんーじゃ、私張り切っちゃいますよー」

浅田「ぜひ頼む」

――

3日後

とある日の朝食にて。

浅田「なあ瑞鳳」

瑞鳳「どうしたの幸四郎」

浅田「幸治郎な」

瑞鳳「あ、ごめんなさい」

浅田「いや別にいいんだけどさ……それよりも聞きたいことがある」

瑞鳳「何？」

浅田「なんでお前が作るやつ全部卵焼きなの？」

瑞鳳「え？」

浅田「いや、結構腹に来るんだよ」

瑞鳳「え、もう作っちゃった……食べりゆ？」

浅田「……食べる」

そう言つて瑞鳳が運んできた卵焼きを口に入れて咀嚼する。甘すぎずとても美味しいのだがこれを3日間食べ続けるのには限界がある。

瑞鳳「そういえば幸治郎はさ、お仕事何やってるの？」

いつの間にか隣の椅子に腰掛けていた瑞鳳が話しかけて来る。体が小さいから椅子とアンバランスだ。そんな事を思いながら質問に答える。

浅田「探偵」

「え？」

浅田「民間の探偵をやってる。まあ、今はその本業よりも大事なことがあるが」

瑞鳳「なにかあるの？」

浅田「……話してほしい？」

瑞鳳「うん」

浅田「じゃあいいお知らせと悪いお知らせがある。どっちから聞きたい？」

瑞鳳「じゃあいいお知らせ」

浅田「君の仲間がいる」

瑞鳳「え、祥鳳姉とかも？」

浅田「ああ、いる」

瑞鳳「そっかー、えへへ。じゃあ悪いお知らせは？」

浅田「そいつらが今危険かもしれない」

瑞鳳「え？ どういう事？」

これは俺の推測だが、と保険をかけながら話し始めた。

俺の事務所に瑞鳳のように何処からともなく艦娘が現れる事。

そしてその娘達は警察送りにして生活し始めたのは瑞鳳が初めての事。

そして孤児院がもしかししたら法的にアウトかもしれない事。

怒るかもしれないと思っていたが一通り話し終えて彼女の顔を見ると意外にも彼女の表情は穏やかだった。

瑞鳳「そつか、じゃあみんなを助けようとしてくれるの？」

浅田「さつき言つたろ。全ては俺の推測に過ぎない」

瑞鳳「でも結果的に助けようとしてくれるよね、少なくとも気にはかけてくれる」

浅田「まあな。俺はお節介なやつだから、な。探偵なんて人種はそんなもんさ」

瑞鳳「フフフ、あ、じゃあそのお仕事いつするの？」

浅田「もうこれからだよ」

瑞鳳「もう!？」

なんだ、夜中は12時からじゃないのか。午後9時なんて夕方の延長戦だぞ。

浅田「なにを驚く必要があるんだよ、善は急げ、だろ？」

瑞鳳「う、うん。まあそりやそうだけどさ。そんなに行動力あるとは思わなかったんだもん。探偵って、ほら、なんかもうちよつと慎重に……?」

浅田「そんなト口くさい事やってられねえよ。オラ行くぞ」

瑞鳳 「どこに？」

浅田 「張り込み」

瑞鳳 「はりこみ？」

浅田 「ああ、楽しい楽しい犯罪行為さ。探偵と刑事の特権だよ」

――

その日の夜、隣町の例の孤児院がよく見える公園の滑り台の上に立って張り込みを始めた。

時刻は夜中の1時だ。

瑞鳳 「しゃ、しゃむい……」

浅田 「ククク、だから言っただけ寒くなるから着込んで行け、と。張り込みは動かないから寒いのお前と来たら。オラこれでも羽織つとけ」

茶色いコートを渡しながらも目は片時も離さない。手にしてるカメラも電源がきつちりついてるし動画で取れるようにとスマホの動画機能もいつでも出せるようにしている。

深夜3時。もう電気が消えてもいい時間だ。街明かりなんて最早街灯だけになって

いる。

だが孤児院の電気は消えない。

浅田「……来た！」

瑞鳳「へえ？どこ？どこ!？」

こいつ寝ぼけてやがるな。コートの裾も擦れてる。それ結構愛用してたのに……。

だが一刻も無駄にはできない。

右手にカメラを、左手にスマホを構えて夜中の3時に滑り台の上に立っている変人がそこにはいた。

だがそれよりも大事なのは窓の中の影絵。

演者はもちろん女の子の子と思しき影と一回り大きな男の影である。

浅田「瑞鳳、見るなよ」

その影絵の内容は簡単だった。男が拳を振り上げ、振り下ろす。女の子が消える。また現れる。おそらく立ち上がったのだらう。今度は男が蹴る。

そんなのが2分程続いた後に男が窓の影から消えて終わった。

「むっ、こいざ」

目を強く瞑り手で目を隠している彼女に声をかける。意外にも泣いていた。

浅田「お前見たんだな？見るなど言ったのに」

瑞鳳「…ごめんなさい。気になって…。そしたら、蹴られてて…。殴られてて…」

浅田「分かってるよ、ンなもん。ほら、帰るぞ」

瑞鳳「…うん」

駅前に向けて歩き出す。タクシーでもあるだろうか。なければ歩いて帰るしかない。ただ個人的には勘弁してほしい。なにせここから家まで5kmはある。

どうしたものかと悩んでいるときに瑞鳳が右腕に組みついて来た。

浅田「どうした？コート返すのならなら家ついたらでいいぞ」

瑞鳳「ねえ幸治郎。君は、あの男の人みたいにならない？」

浅田「誰がなるもんか。あんな腐れ外道」

そう言った後にしばらく歩くと駅前についていた。

人は誰も歩いてなくてただ一台タクシーがあつた。

浅田「おい運ちゃん。隣の浅田探偵事務所まで頼むよ」

運ちゃん「ああ、あそこですね。じゃ、シートベルト締めて下さい」

家まではそこから15分ほどでついた。

布団を敷いてそのまま横になる。

浅田「じゃあな、おやすみ瑞鳳」

瑞鳳「うん、おやすみ幸治郎」

そう言つてしばらくの眠りの世界を謳歌しようとした。

その落ちるまでの間にいろんなことを考えた。

明日の依頼は相続だったな。確かあそこのおばさんは頑固そうだった。

そして今日の朝飯は俺が作ることになりそうだ。しばらく寝させてやろう。

… 卵焼きじゃなくてパン食べたい。

――

？ 「で、そのような男が確認されたと」

？ 「そのようですよお、あの後駅前でタクシーに乗ったのでそれを尾行して住所は控えておきましたケド」

？ 「そうか、上出来だ。全く国民というのは酔狂な連中と馬鹿どもしかおらんわ…」

第3話

誰だよお前

雨が降っていた。いま遺産相続の決着がついた帰りだ。今回の相手は面倒だった。最後の最後に粉飾を加えてくるとは……。

? 「ニャー」

浅田 「ん?」

猫の鳴き声が聞こえた。はて、ここに住み始めて5年が経つが野良猫なぞ見たことがない。では飼い猫でも逃げたのかと思ひ鳴き声がした方を見る。その声の主は黒い子猫だった。

濡れた段ボールの中に入っていて蹲りながらこちらを見上げていた。段ボールには『拾ってください』の文字。

浅田 「テメエもか」

いつの間にか猫に話しかけていた。もちろん猫は喋らないし鳴きもしない。

浅田 「テメエは要らないって言われたのか」

「ニャー」

浅田「さみしいよな、そう言われんのは」

――

浅田「帰った」

瑞鳳「あ、お帰りなさい……。うわあー！猫ちゃんだ！どこで買って来たの？」

浅田「イヤか？先ほどそこで拾って来たもんだが」

瑞鳳「いや、すごい嬉しい！ありがと幸治郎！」

そう言つて瑞鳳は猫を抱きかかえながら風呂場に向かつていった。

それにしてもあいつは猫が好きなんだろうか。鼻歌を歌っている。

非常に可愛らしい。

そこまで考えてから頭を振り思考を止めた。

俺は何を考えているんだ。

瑞鳳「ねえ見てみて！すごい綺麗になったよ！」

そう言つてその黒猫を突き出してくる。

でもどの辺りが綺麗になったのかよく分からない。元々の黒いままだからだ。ただ

ちよつと毛並みは先ほどに比べてツヤツヤしているかもしれない。

浅田「ああ、綺麗になったな」

そう言つて黒猫を撫でる。

瑞鳳「え？それつて猫のこと？」

なぜかモジモジしながら聞いてくる。

浅田「あ？それしかねえだろ」

瑞鳳「あ、うんそうだよね」

そう言つてあははと笑い猫をわしやわしやと撫で始める。ちよつと乱暴に、

瑞鳳「そういえばこの子の名前どうする？」

浅田「いや、黒猫は黒猫だろ」

瑞鳳「え、名前はつけなくていいの？」

浅田「いいのさ、愛着なんて湧かせなくて」

瑞鳳「でもこの子がかわいそうだよ」

浅田「……………分かったよ。じゃあ瑞鳳がつけていいから」

瑞鳳「えつとね、じゃあブラックジャック」

浅田「待て、なぜ無免許名医の名前を出した」

瑞鳳「え、いやだって黒いしジャックって名前いいかかって思っ…」

浅田「いやそこはどっちかにしろよ」

瑞鳳「じゃあジャック」

浅田「それでよし」

ジャックって名前の方がまだマシだと思う。海賊みたいな名前だけど。流石に手
●
プロダクションに怒られる。

ピンポーン。

玄関の呼び鈴がなる。誰だろうか。まあ心当たりがあるのは1人だけだが。

浅田「はいはい今出ますよーっと」

瑞鳳「誰？」

浅田「多分俺の友達のナメクジ脳みそ野郎だと思う」

瑞鳳「… 本当に友達なの？」

浅田「一応な」

そう言っただアを開ける。

？「おほー、遊びに来たぜ幸ちゃん！」

浅田「帰れ」

そこにいたのは丸刈り頭のガタイのいい男だった。

第4話

28歳、忠告をする

？「友達に向かつてその言い方はないだろ!？」

浅田「うるせえよ、こちとら仕事やってんだよ。お前だつて仕事じゃねえのか」

？「抜け出して来たんだよ、やってられるかよあんなむさ苦しい配管工なんて」

そう言つてズカズカと家に転がり込んでくる巨漢は俺の腐れ縁である井上東吾、29歳童貞である。

この男、一浪で大学に入ったので俺と同じ学年だったが1つこいつの方が年上である。

だがその身体能力の高さたるやオリンピック選手に次ぐ物がある。

特に体力が化け物で1周400メートルのグラウンドを20周しても息1つ切らさなかつた。

ジャック「ミヤー」

井上「おお！子猫じゃんか！どこかで買って来たのか？名前はあんの？」

浅田「あー、そこらで拾つて来たんだよ。あと名前はジャックな」

瑞鳳「どうしたの幸治郎？お客さん？」

風呂から瑞鳳が出て来た。シャワーでも浴びて来たのだろうか、少し髪が湿っている。そして服が薄い水色のモコモコの寝間着になっている。まあもう夕方だしね。しかも猫ずつと触つて毛がついたんだろ。

井上「…… お前いつから彼女できたの？」

瑞鳳「え？彼女？……私？」

浅田「まあそう結論を急ぐなナメクジ脳みそ。こちらも拾い子だ」

井上「あ、そうなのか。いや、すごい綺麗な人だったからさ。でも拾い子か。なんで孤児院に預けないんだ？最近出来たところあるだろう」

井上「…… あそこは、なんかカツカツなんだよ。うん」

適当に誤魔化す。張り込みの証拠映像をどうしようかと困っていたところにこれだ。時々この男は異常に直感がいい。

井上「あ、そろそろシフトだ。戻るわ」

浅田「おお、そうか。俺は飯をせびられなかっただけ嬉しいぜ」

井上「お前言い方があるだろ！」

瑞鳳「彼女……彼女かあ……」

なにやら瑞鳳がぶつくさ呟いているがどうでもいい。それより気になることがある。

浅田「なあ東吾、これからの話なんだが」

井上「おう！どうした？」

浅田「あまり俺の家に来ない方がいい。極力電話で事を済ませろ。それも公衆電話だ」

井上「どういう事だ？」

浅田「いや、なんと言うことはないんだが……少しつけられてる可能性がな」

井上「……分かった。気をつけるぜ」

浅田「助かる」

井上「じゃ、また来る……じゃねえや。電話すつかんな」

浅田「おう」

そう言って手を振りながら帰っていった。なんだかんだ言っただうせちゃんとして仕事をしに行くんだろう。

あいつに飛び火しなければいいが。

背中に向かってそう願った。

| | | |

これからまた配管工の仕事だ。かつたるい。

それにしても尾行されてる……か。あいつが家にくるなどはよほどの緊急事態だな。

そんな考えを巡らせていたせいか背後に忍び寄る影に全く気がつかなかつた。その影の右手が持っている睡眠薬がたつぷりと染み込まれたハンカチの存在にも。

| | | |

？「……と、言った感じで孤児院の子達の生態調査進んでるヨ。案外人と変わらない

ネ」

？「そうか……気味が悪いな。急に現れた女か……。そういえばそのアパートの管理人の探偵が動き始めたと聞いたが？」

？「ああ、それならもうウチの手下が張り込みしてるヨ。出入りした人間は友達の関係なら拘束したって構わないツテ言ってるカウ」

？「そうか：：随分と骨のある下民もいたものだ」

下品な笑いを夜の帳に響かせた。

そんな東京都千代田区霞が関の夜。

第5話 28歳、不貞寝を決め込む

浅田「じゃ、これをテレビ局に持って行こうと思う」

そう言っ出て出したのは張り込みで使ったカメラ。そしてスマホの写真を保存したメモリ。

瑞鳳「テレビ局に持っていくとどうなるの？」

写真すら見たくないのか目を微妙にそらしながら聞いてくる。

そりや、まあ見たくはないよな。

浅田「テレビ局には視聴者から映像を提供してもらってそれを報道するシステムがある。だからそれを利用してこれを報道させてもらう。まああまり信用は出来ないが」

瑞鳳「なんで？」

浅田「あいつらは良く改竄するからね。結構バレるごまかしもあるんだけど民衆は気がつかない。もしかしたら気づいてるけど事を荒だてたら国が終わるのも薄々感づいてるのかも知れない」

瑞鳳「……………」

浅田「つと、暗い話になっちまった。じゃ、送信つと」

そう言つてメモリを某放送局の視聴者映像欄にぶち込んだ。

放送予定時間は明後日の19時から放送するニュース番組だ。

先着5件でそのうちの3件目なので放送されないと言うことは順序としてはあり得ないだろう。

—————

そしてその次の日の19時。どのテレビ局もやっているような情報を垂れ流し好き勝手な批評を言い終わつた後にその視聴者から提供されたものを放送する例のコーナーが始まつた。

電車で騒ぐ若者だとか叱責する上司だとか色々出てきたが、いぞあの動画は出てこなかつた。

若者への批評を始めたテレビを消してもう寝ようとする。

瑞鳳「出なかつたね、アレ」

浅田「まあそんなもんだろ、はなから信用はしてない」
そう言うなり俺は不貞寝を決め込んだ。

――

幸治郎が不貞寝を決め込んだ後何をすればいいのかと言う謎の焦燥感が湧き上がってきた。

人とは別の誰かが何かに打ち込んでいる側でダラけていると焦燥感を感じるものらしい。

なんか力になれないかな。

最初に思ったのはそんな事だった。

そういえばどこかで人の疲れを癒す行為を教わった。

確かこうだったけ？

足を伸ばしその太ももの部分に頭を乗つけるとそのまま自分も横になった。

瑞鳳「おやすみ、幸治郎」

――

朝が、始まる。

非常に平日の朝とは何とも起きたくない、このままだらけていたい時間である。

だが今回だけは違った。

固い枕の感触に替わりにモコモコ、ムニムニとした柔らかかでフワフワとした感触が左側頭部に感じる。

ジョーを枕にして寝た場合は事案だが肝心のジョーはいつもソファアーの上で寝るの
で問題ない。

よし、大丈夫だ。そう思い起き上がろうとモソリと動くと声が聞こえた。

瑞鳳「ちよ、んんツ！格納庫、まさぐらないで…」

強制的に微睡眠から引き剥がされガバツと起き上がるとそこには瑞鳳が寝転んでい
た。

おそらく起き上がった位置と今の目線から考えるとおそらく寝ていたのは太ももの
付け根。そしてまだ左耳に残る感触から鑑みるに下腹部に顔を向け寝ていたに違いな
い。

あかん。

事案なんてもんじゃない、完全に刑事訴追だ。孤児院どころか刑務所にぶち込まれる。

瑞鳳がゆつくりと起き上がる。

浅田「すいませんでしたッ！」

初っ端から謝る。

謝罪というのは非常に大切だ。

まあそんなので許してもらえたら探偵も警察もいらさない訳だが。

瑞鳳「あ、いや、その、別に……私がやったんだし……（膝枕を）」

浅田「あ、そうか……」

どうやら俺が青い制服のオジさんたちに連れてかれることはなさそうだ。

さて、仕事に行こう。

| | | |

この孤児院はひどい。

こんなにも酷い仕打ちを受けたのは初めてだ。

とは言ってもここでずっと生きているのだからこれ以上いい待遇だったことは一度しかないが。

あの探偵だという男の家。

あそこは素晴らしかった。固形物を食べさせてくれ、暖かい寝床をくれた。理想的だった。

いや、本当に想像の産物だったのだろうか、あれは。指一本触れることすら許されないカーテン。

その隙間から少しだけ見える楽しそうで平和な光景。それすら私達が描いた幻想だとしたら。

多分ここには耐えられないだろう。

終わりはいつだろうか。明日か？来週か？1ヶ月後か？1年後か？

そのいつ始まるかもしれない終わりはいつだろうか。

少なくとも、この時、私の中にある一種の砂時計のようなものから砂が落ち始めた。

これが全て落ち切った時に、どうなるのだろうか。

それを想像させるのはあまりにも残酷だろう。

第6話 嫌いじゃないぞ

「えっと、それで今回はこのお仕事を頼みたいんですケド」

「……………」

今俺は困惑していた。

探偵事務所で今依頼を受けている。

特別難しい依頼というわけではない。

「あの、聴いてますか？」

「あ、はい」

この金髪のねーちゃん、あの孤児院の依頼を出してきやがった。

まさか知ってるのか？ 艦娘について、そしてそれらと俺の関連性について。

ま、ただの偶然だろう。考えすぎだ。ここは結構街でも噂だしな。

すると偶然ポロっとペンを机の下に落としてしまった。

「失礼、ちよいとペンが…」

そう言っつけてしゃがみ込み机の下に落ちたペンを拾う。目の前には彼女の長くて白くて全く傷もシミもない脚。

その脚についている靴を確認して起き上がる。

「えーつと、とりあえずその孤児院の内情調査をさせていただくと言うことでよろしいですか？」

「そうデス。よろしくお願いしますネ」

そう言っつてそのねーちゃんは出て行った。

どうしたもんか。

おそらくあのねーちゃんの履いていた靴は誤魔化そうとABC martのロゴで偽装していたがロシアの超希少ブランドの物だ。若い女が買ったものではない。

普通は流通していなく、更にはモスクワの外れあたりの1店舗のみの店なので普通は買えないはずだが……。

少なくとも只者ではない。何となく雰囲気からそんな気はしていたが案外大物なのかもしれない。

「ビュンゴかも… なあ…」

そもそも国から真つ向に齒向かおうとなんて思っていない。

そんなものは激流の中を逆らつて泳ごうとするようなものだ。

どんなにうまく事が運ぼうが圧倒的な強者から力業を出されてしまえば弱者の小手先の技など通用しない。

だからその激流を生きて切り抜けるにはどうするか。

流れに逆らわず、少しずつ、少しずつ、知恵と力でずれて岸まで辿り着く。それが一番遠回りでも一番難しくても一番賢い方法だ。

俺は支度を始めた。

――

1日後、俺は支度を済ませ、そのまま孤児院に向かった。下手に変装をすればどんな理由で来たのかが分からなくなるし嘘がバレたらいれなくなる。

だがここで問題が1つ。

「何でお前ついて来てんの？」

「だってー、ジャックは寝ちやうしー人で家は寂しいでしょ？」

そう、瑞鳳の問題である。勿論説得はした。納得もしてくれた。だがついて来た。本当にお前そういう所……。

「嫌いじゃないぞ」

「え？何が？」

「いや、なんでもない」

そうやって門をくぐる。警備員が3人ほど俺たちに気付いて近づいてくる。ご丁寧に警棒を構えて。

「どなたですか？引き取りにきてくださったのですか？」

お、意外にも丁寧な対応だ。慇懃無礼と言うのかもしれないが。

「いやー、急にすみませんね。不本意なんですすがクライアントにここを調べて欲しいと頼まれました」

「あー、そうなんです、はい、はい……。ちよつと上役に掛け合つてきますので身分を証明できるものをご提示ください」

そう言われて自分の名刺を差し出す。ちなみに急ごしらえなので電話番号もない。だからなんか言われるかと思つたがそんな事はなくそそくさと2人が中に入つて行つてしまった。

警備員の中で1人残つた大柄な男が意外にも柔らかい物腰で応接間まで案内してくれた。

「こちらです」

そう言われて入つたその部屋は意外にも明るく、清潔感漂う近代的な部屋だった。よくありがちなゴテゴテした装飾品もない。

「いや、悪いね。そんな長話はしないからさ」

「そうですか。まあどうぞゆつくりして行つてください……。あ、上役がいらしやつたようです。では私はここで」

そう言つてその巨漢の警備員は席を外す。代わりに入つて来たのは少し線の細めなメガネの中年男だった。ちなみに頭頂部も少し砂漠化が進行している。

「どうも。私、この孤児院で院長をしています。尾長啓司と申します」

そう言うのと細い目を歪ませて握手を求めて来た。

なんか狐みたい卑屈な笑みが腹たつ。

だがそんな苦い気持ちを嘔み潰して俺は握手を交わした。

「では、調査という事でしたな。ぜひぜひどうぞ」

そういうなり案外素直に案内を始めた。先程から一言も発さず俺の上着にしがみついてくる瑞鳳も一緒だ。

第7話

己と人の天秤

その狐の様な尾長と言う男は意外にもスマートに施設の内容を教えてきた。

元々学校として建築予定だったこと。それに伴い渡り廊下に沿うようにして部屋が割り振られていること。体育館がある事。

説明はしてくれたが実際に連れて行ってくれた場所はほんの僅かだった。

これでは部屋の内装すらわからない。どうしたものか。しかも内装どころか艦娘に一人も会わなかった。おそらく部屋に押し込められている可能性が高い。

まあどちらにしろもうここに収穫はなさそうだ。少しでも話を聞けたらよかったんだが……。

その場合はあのねーちゃんからもう一度依頼を受けるしかない。流石に2回目になればこの施設だって誤魔化しは効かないはずだ。

もうこのところは引き上げるか？

そうだな。よし、もう収穫はない。1つだけ聞いてから帰るか。

「なあ、尾形さん」

「はいはい、どうされました？」

「この施設、地下室みたいなものはあるのかな？」

「いえいえいえ、そんな物騒な設備は存在いたしません。我が孤児院は完全にクリーンでござります」

「なるほどね、では失礼。ホラ、瑞鳳。帰るぞ」

「う、うん…」

応接間のドアを開けて外に出る。

「尾形孤児院長」

そうやって探偵がいなくなった後に現れたのはガタイのいい先ほど応接間まで探偵を案内していたあの男。

「どうした、須藤」

「あの男の処分はいかに」

「あの男、地下室があるかと聞いてきやがった。感づいているかも知れん」

「では…」

「殺せ。今なら敷地内で仕留められる」

「了解」

「さーとと。どうしたもんかな」

伸びをしなからそう呟く。

「大丈夫？肩凝ったの？」

「瑞鳳。肩凝らなくても伸びをしたくなる時はあるんだぞ」

「例えば？」

「そうだね、後ろから拳銃で撃たれようとしてる時？」

そう言って瑞鳳を突き飛ばす。瑞鳳が転んだので彼女には当たらなかったが俺の左

の二の腕から血が吹き出た。

「チツ…」

そのまま地面に倒れこむ。

「え？幸治郎？大丈夫!?ねえ、ねえつてば!!」

「ダメだと思えますよ」

「あ、あなた確かあのおじさん？」

「そうですよ。その浅田幸治郎?とか言いましてつけ。大丈夫ですかね、すぐに死んでしまいます。今一刻も早く病院に行かなければ」

「じゃ、じゃあ私が！」

「ダメですよ。少なくとも『条件』を飲んでいただかないと」

「『条件』?」

「そうです、あなたがこの孤児院に来てくれるのならすぐに救急車を手配します、しかしあなたがもしもこの孤児院にとどまらないようなら…」

「そうやって懐から拳銃を取り出しトリガーに指をかけ銃口を倒れこむ彼の背中に向ける。」

「今、ここで殺します」

――

どちらを救うか。自分か？幸治郎か？天秤の重さが釣り合っている。微動だにせずどちらにするか迷っている。

もしかしたら私がぼやぼやしてる内に痺れを切らしてトリガーを引いたら。

そうだ、彼が巻き込まれる話では無いのだ。だから私がここで。

「分かりました。行きます。だから…だから、こうツ、幸治郎に、手を…：…出さな
いで…。」

最後の方は泣きじゃくって自分でも何を言っているのかさっぱりなほどにグチャグチャな声を吐き出した。

私がここに入ればいいのは分かっている。

でも貧しい癖に養ってくれる彼の。

寒い寒い夜に自分のコートを渡してくれた彼の。

そして少ししか見てないがその優れた頭脳の全力を傾けて自分の仲間のために働いてくれる彼の全てを、否定するような気がした。

今自分が孤児院に一步を踏み出せば幸治郎は危険がなくなる。

ただ私が来る前からやっていたように探偵業をするだけだ。

でもそれで彼が幸せになれないのも知っている。人というのは感情が高まるとそれを抑えるために涙を流すようだ。

「さあ、どちらにしますか？」

「こつちだ、このクソ猿が」

「幸治郎!? 大丈夫だったの?」

「探偵の腕なんぞ何の需要もない。探偵を殺したいなら頭脳を撃つべきだったな」

「貴様ツ！」

「遅い！」

そう言つて警備員が構えた拳銃に何かの液体をかける。

それは一気に白煙となり蒸発した。

だがその一瞬が命取りだった。先ほどまで探偵が倒れ込んでいたところに血痕があるだけでそれ以外の跡は何もなかった。

「逃したか……」

舌打ちをして警備員は中に戻って行った。

「幸治郎？大丈夫？」

「あ？問題ないよ、ただ少し病院で銃弾だけ取り除かせてもらう。少し病院に寄り道する方がいいか？」

「うん」

「で、最終的に13日入院しちゃった…。」

「頑張りすぎだからね、幸治郎は」

13日ぶりの家路に着く。

20分程歩きようやくアパートの事務所に着く。

机に乱雑に置かれた書類を整理して寝ころがるうとした時後ろから元気のいい声が聞こえて来た。

「こんにちは！雪風です！ここどこか知ってますか!？」

瑞鳳とは違う声に眠気を吹き飛ばされながら振り返るとそこにはスカートの無いセーラー服を着た瑞鳳よりさらに小さな艦娘、『雪風』がいた。

そう言えば瑞鳳が来てから1ヶ月近く経つもんな…。

まだまだ増え続けるであろうエンゲル係数を思いながら寂しく笑った。

第8話

28歳、中年になる

増えてしまった。

艦娘が増えてしまった。

簡単に俺が今置かれている状況を説明しよう。

俺のマンションから時々何故か艦娘が現れる。

俺は彼女達を孤児院に送った。

そこがブラックだった。

ちようどその時現れた瑞鳳と共に孤児院から何とかして救うことを決意。

探偵として潜入するが特に収穫もなく腕を撃たれる。

そして入院。13日後に退院したら事務所に雪風が現れた。

そして現在に至る。

「なんだ。今まで通りじゃんか」

「艦娘がくる時点で普通じゃないと思うよ。はいこれ麦茶」

瑞鳳が呆れながら麦茶を置いてくる。キンキンに冷えてるのか結露していて机を濡らす。書類が濡れた……。

その麦茶を飲み干して次はどの手を打つかを考える。

また潜入か？

まさか。芸がない。

しかしもう表立って行つては殺されかねない。今度こそ頭をバンだ。

じゃ、バレないように行きますか。そう思い押入れを漁り始めた。

「あの、幸治郎？それ何？あと卵焼き食べりゆ？」

「ああ、もちろん食べりゆさ。これ変装用の仮面な。あとこれから5日ほど断食するか
ら」

「んエエ!? 死んじゃうんじゃない?」

「大丈夫。水と塩とほうれん草はちゃんと摂るさ」

さて、俺が採用した作戦はどこまで通用するかな。

「久しぶりに来たぜ」

そうやって不敵に朝の風に吹かれる孤児院を睨む。俺は今中年男性のマスクを被り、その上から虹彩を変えるコンタクトを付けてサングラス。駄目押しに身長をぐまかす厚底の靴だ。

何に今変装してるかと言うと電気業者。これから整備のフリをして孤児院長室の天井裏にハウリングへの反応を極限にまで抑えた特殊な盗聴器を入れる。

普通国立の施設に盗聴した場合は国家機密漏洩罪に問われるがああロシア人のネーチャンと契約した際に結んだ書類に書かれている文書の出番だ。

『この件の調査はいかなる手段を用いようとも殺人を除き、罪には問われない』
こんなにも分かりやすい文書は無い。この文書があればなんでもできるのだ。

と言うわけで盗聴だつて罪では無い。

探偵なんてそんな仕事なのだ。

彼女の父親を麻酔で昏倒させたり助手と偽って女子高校生を苛め抜く魔人などの上には行かないが無いものは無いものなりに知恵を絞り策を練り、強者に立ち向かう。

だからこそ探偵という仕事はカッコいいしそのカッコよさに俺も惹かれたのだ。

「誰だ。名前を言え」

「住吉株式会社の丸山と申します。電気系統の確認に伺いました」

「よし。中に入れ」

案外簡単に潜入できたな。まあ個人の探偵がここまでやるとは思っていないからなのだろうが。

まずは和室の棚を使い天井裏に入り込む。そこから孤児院長室と思しき場所へと一面を確認しながら天井裏で移動する。

そしてその配線に盗聴器をセットしてから屋根裏の散歩を終えた。

さて、バレなければいいが…。

「ただいま。何か留守中にあったか？」

「お帰りなさい。えーと、あのね。雪風があそこでお客さんとUNOしてる」
「客？」

「上がり！雪風の勝ちです！」

「なんで!?!なんで全色揃ってんの!?!4回連続スキップとか勝ち目ないんですけど！酷くないかこれ！さつきから見えないように札を切ってるの!?!」

「ひどいのはお前だ阿呆が」

そう言って人の家に勝手に上がり込み人の家のカードで勝手に遊ぶ七三分けの黒髪が生えた頭に鉄拳を落とした。

「痛ッ!?ああこんには浅田君今日は大変いいお天気ですなそういえばいい天気といえど僕と君がともに行つた研修もこんな晴れ方をしていましたねちなみにもう博識な君はご存知だと思いますが晴れ方というのは気象庁が定めた規則によると」

「ストップ。句読点を入れろよ。読みにくすぎるだろこれ。行をめちゃくちゃ使つてるのになんで頑なに句読点をしようとしなんだよ」

「…読みにくいってなんのことですか？瑞鳳さん」

「私たちが知っちゃいけないお話だよ」

「そんな事どうでもいいじゃないかとそれよりもあの女の子たちはなんだい？生徒とか？」

「……俺が教えるのをやめたのはお前の記憶にも新しいと思うが？」

「おっとすまない。あまり聞くのも無粋だしね」

「それが賢明だ」

第9話

28歳、希望を絶たれる

七三分けが遊び終わった後の家の内情は散々な光景だった。

雪風は散らかったUNOの見当たらないカードを必死に探し。

猫のジャツクは掻き乱された毛並みを舐め続け。

瑞鳳は散らかった部屋を片付け。

俺は七三分けをしばいていた。

「てめえ巫山戯んなよマジで。なんで人の家勝手に上がって勝手に大惨事巻き起こしてんだ」

「ごめんなさいごめんなさい！悪気はなくてただ遊びにこようとしただけなんです！」

南 成幸。俺の悪友であり近所の高等裁判所の裁判官でもある。いつもは至極真面

目なのだが……。

「で、なんでまた来たんだ。なんか用事あるんだろ？」

「当たり前でしょ？最近上の方も忙しいらしいさ」

「やっぱりな、どう考えてもこのタイミングじゃその話だと思った。孤児院だろ？」

「そうだよ。いやー、察しがいい友達やはり持つべきだね」

そう言って南は頭をポリポリと搔く。この少し話に詰まった時に頭を搔く癖は昔から変わらない。

「で、なんだ。何か話でもあるのか？」

「そうなんだよ。お前、裁判所行こうとしてるだろ？」

「……………何もかもお見通しって訳か」

そう、正直な話内閣、国会がダメなのだから裁判所の司法権でさばいてもらおうかとも考えた。だからその話をしようと思いい追返しはしなかったのだが……………。

「何もかもって訳じゃない。ただ君にこれだけ言おうとしたんだ」

「なんだ？」

「これは浅田幸治郎の友人、南成幸としてではなく唯の裁判官として言わせてもらう。僕達名古屋高等裁判所は君達の訴訟を受理することはできない」

「は、まじかよ!?!勝訴の見込みがねえつてののか?」

「ああ、申し訳ないが上からの圧力、そしてお前が今持っている不確かな情報では勝訴の見込みはゼロだ」

「恐ろしい奴だな。もう情報量まで分かっているとは……」

「結構有名だぞ?公園でずっと女の子と明後日の方向向いてる変人がいるとか、電気屋を徘徊し続けた挙句盗聴器買って出て行く怪しい目つきの男とか」

「待て、そんな不名誉な噂立てられてんの?しかもお前に入ってることは警察にも入ってるの?」

「うん。だから要注意人物にリストアップされている。だからそんな奴が勝訴できるか?」

「……無理だわ」

「そう言うことだな。じゃ、これから裁判だから。帰るわ」

いつの間に俺は警察にマークされてたんだ。そりゃ訴えても勝てない訳だ。俺の敗因を考えろ。その原因を考えて改善すれば勝てる。そうやって今まで裁判で勝って来た。

俺の敗因……。

1つ目、不審者扱い。こればかりはどうしようもない。自分の潔白を証明するために訴えることもできるだろうが裁判は金がかかる。瑞鳳、雪風の飯代とジャックの餌代でカツカツになって来ている俺の財布では二回も訴えを起こすなんて到底できない。

2つ目、訴える情報が少ない。今持っているのはただ殴りつけているように『見える』だけの写真、動画、そして撃たれたという事実だけだ。最後のは決定的だろうが自己防衛を持ち出されたら『不審者』では文句が言えない。

では、どうするか。決定的な虐待の証拠を掴まねばならない。

どうやって掴むか？

それさえ考える。頭で、力量で、真実を探す。

「なあ、南。それってよ、やっぱりちゃんとした証拠があればいいよな？」

「そうだな。頑張って探してくれ。心からの訴訟、お待ちしておりますよ。天才探偵様」

そう言って腹の底の読めない男は腹の底から笑いながら曇り空の下、街に消えていった。

「とりあえず…こいつらから調べていくか…」

そう言ってジャックと戯れる2人を見る。

艦これというゲームについて調べる必要があるそうだ。

「練度……レベルみたいなもんか。そして艦種というものがあり雪風が駆逐艦、瑞鳳が軽空母……」

「こうじろうさん！何やってるんですか？」

「あ、雪風。今ちよつとお前らのことについて調べててだな」

「雪風のことみんな知ってるんですか!？」

「結構な人数知ってると思うぞ」

そう言つて『艦これ システム』で検索する。

「ホレ、ジャックが暇してるから遊んで来い」

「はい！雪風行きます!!」

そう言つて日なたでくつろぐ黒猫目掛けて雪風が飛びかかる。

悲惨な黒猫の叫び声が聞こえてくる。許せ猫よ。

そしてパソコンの画面に目を戻す。一番上に表示されたウェブサイトを開く。

「練度、装備、艦隊の鍛え方……へえ。結構再現度高いじゃん」

そう言いながらそのウェブページを見続ける。

そして1つの項目で目が止まった。

そのシステムの概要を見た後少し笑った。
「こんなシステムがあんのか……。なんだ。ヌルゲーじゃねえか！」

第10話

策を講じろ、足掻け止まるな

5月も終わりに差し掛かって来た日の夜だった。

夜景は社畜の残業で出来ている、と言う格言がある。

しかしこの一人部屋に何をしてもなく座っている男は働いているのでは無い。その逆である。

彼は一人酒を愉しんでいるのだった。

日中は国会でボロが出ないように答弁をしてマスコミに追いかけられ、与党から批判ばかりされるのだ。1日1回はこの時間がないとやって行けない。

そう、彼はいわゆる政治家というやつだった。政治家といってもあの中年などではない。まだスマートな感じのする、30半ばである。

良くも悪くも政治家らしい、酒と権力、そして弁論に秀でた才能があった。

だから彼はその才能を自分のために使った。ある時は名誉のために、またある時は金銭の為に。

結果、彼のその才能は凄まじい効果を發揮した。5年前に第1党だったにも関わらず支持率が地に落ちた自分の党の支持率を持ち前の口八丁でうなぎ上りにして、与党に返り咲く一歩手前まで来た。

だからこそ、彼は前内閣の、自分の党の古狸の犯した不祥事を、汚職を隠蔽したい。『あの』孤児院もそのうちの1つだ。元々あの施設では密かに預かった子供達で人体実験を行うつもりだったらしい。

まあ艦娘という存在によつてその役割の対象は一般の子供からゲームのキャラクターへと大きく変遷することになったわけだが。

マスコミにも少なからず金を払い、国会にも、内閣にもバレないように水面下の工作だった関わらず一人、思わぬところからの横槍が入った。

その孤児院の近所に住んでいるという、艦娘を連れて来た張本人の探偵。あの男の素性を調べたが、自分からは想像もつかないほど惨めな人生を送つて来たようだ。

そんな男に対しての敗北は許されない。そんな彼のプライドが動いて居た。それはもはや執着のようなものだった。勝利への、自らへの執着。

彼は天才だった。自分が天才だと声高に叫ぼうが、周りの人間がそれを許容できるほどの。

過去の党の悪事がバレないのは彼の答弁が超一流だから。

野党の議員が堂々と活躍できるかという彼の才能が超一流だから。

彼がなぜ高慢かというのをそれを咎める才能の持ち主がいなかったから。

だが、彼は気付くべきだったかもしれない。

敵も又、超一流だった事に。

瑞鳳「で、何？幸治郎。話って」

夜、と言ってもまだ午後9時。雪風が寝る時間を見計らって瑞鳳に声をかけた。あの

健康優良児め。

浅田「話つていうのはな、まあ大切な話だ。これからのお前を振り回すかもしれない」
瑞鳳「……今までだつてそうじゃん？」

浅田「そうか？」

瑞鳳「だつて今まで色々やつて来たつもりだよ？あの夜中に見張りした時だつて風邪引いちやいそうだったんだからね」

そう言つて彼女はくすくすと口に手を当てて笑う。

浅田「俺そんなにひどかったか……？まあいいや。とりあえずようけんだけ言うぞ」

浅田「お前、俺とケツコンカツコカリしろ」

瑞鳳「へ？」

第11話

最後の秘策

雪風「おはようございます、こうじろうさん!!あれ?瑞鳳さんどこですか?」

浅田「おはよう雪風。まだ朝の6時だぞ...あと瑞鳳ならそのソファで悶絶している」

そうやって俺が指差した先には瑞鳳がクッションにしがみ付いてウーアー、と人語ではない謎の音声を発している瑞鳳がいた。

雪風「どうしたですか?瑞鳳さん?」

瑞鳳「うう...:~:~:~:。聞いてよ雪風ちゃん、ケツコンされちゃった...」

雪風「そうなんですか!?!おめでとうございます!」

瑞鳳「でもこんな急にさ...まだ心の準備だつてできてないのにい...!」

浅田「ではお前は準備ができればいいのか?」

瑞鳳「え?ま、まあそりゃ、ね?そんなに嫌いなわけじゃないし...」

浅田「...:~:~:~:」

雪風「……………」

瑞鳳「え、ちよつと待って。なにその沈黙？」

雪風「いや、好きなんだなって」

浅田「俺はこんな奴でも嫌いじゃないやついるんだなって」

瑞鳳「自己評価低すぎない？」

浅田「そうか？まあそんな事はどうでもいい。作戦概要を説明する」

瑞鳳「本当にできるの？それ…」

雪風「色々悪い人のような気がして来ました…」

浅田「何か問題でも？騙して騙す。簡単だろ？それに資金面とか時間的にもこれがラストチャンスだ。気張って行こう」

浅田「で、だ。お前らにはまず戸籍を作ってもらおう」

瑞鳳「どうやって？」

浅田「役所に行つて新しく作る。普通は生まれた時に既に出来ているはずだが一部で

は無戸籍の人間がいるんだ」

雪風「どうしてですか？」

浅田「親が制度を理解してなかったり書類作成から受理までにかかる費用を負担できなかったり：：だ。今回の口実は自宅出産をしたから出生証明書が無い、という設定でいこう」

瑞鳳・雪風「??????」

浅田「つまりお前らは生まれたと言う証明ができない。でもそこに居る。だから存在を認めてもらうために戸籍を作りに行く。そう言う感じだ。まあお前らは余計な口挟まずに黙って見てろ」

雪風「はい：：」

浅田「あ、あとお前らの名前に含まれる漢字には名前にしてはいけない漢字が含まれている。だから偽名を使うぞ。あと苗字は俺ので」

瑞鳳「思いつかないの？」

浅田「一応ケツコンしているんだ。苗字一緒にしないと変だろ」

瑞鳳「え、うん。まあ確かにね」

浅田「あと雪風、お前はちよつと同じ名前にしなくていいぞ」

雪風「えく！なんでですか!？」

浅田「それが1番のキモなんだよ。ちゃんと変えねえと後々響く。事が終わったらちゃんと姓を同じにしといてやつから」

騙す事。それ自体については俺は何の躊躇いも無い。どうせ何もしなくても騙される世界だ。それなら騙して騙されるゲームをした方が100倍楽しい。

浅田「で、準備はいいだろうな」

雪風「はい！バツチリです！」

瑞鳳「あの・・・これ大丈夫なの？」

浅田「心配するな。ダメならそこまでさ・・・」
雪風、お前の活躍に懸かっているからな。頼んだぞ」

雪風「はい！」

第12話 因果応報

浅田「さて、こんなものか」

瑞鳳「…本当にこれで良いの？」

浅田「当たり前だ。一見しても分からないだろう？なあ雪風」

雪風「はい！老けて見えます！」

浅田「それは語弊あるから止めような」

また変装している。今回も瑞鳳と。雪風はそのままなので変装はして居ない。

今回の作戦内容はこうだ。

瑞鳳、雪風には戸籍を作ってもらった。これで一応役所からの後ろ盾は貰えた。

そしてそこで俺と瑞鳳で変装、雪風を拾い子として潜入させる。勿論雪風の体も考えて1週間程の潜入だ。

雪風にはあの頭の飾りの中に盗聴器を仕掛けた。解除も発動も自分で出来る優れもの。

そしてそこでの訴訟。

あとは何個あるのだろうか。そう思い少し身震いがした。

――

職員「で、こちらへの引き渡し、と言うところで良いですね？」

浅田「ええ、養いたいのですが何しろ年金暮らしでねえ、お金がないんですよ」

潜入当日、雪風を預け、瑞鳳と俺は老夫婦を演じていた。

年金暮らしというのは嘘だ。だがお金がないのは本当だ。本音に嘘は混ぜるモノ。

存外大した事なく終わった。雪風には自然体を貫くように言っただけだし瑞鳳はただニコ笑ってただけで何も喋らない。

さて、後は天と自分の頭と瑞鳳の努力と雪風の豪運に任せるとしよう。

雪風を送り込んで3日目。今日も今日とてハウリング。随分と生活サイクルが分かるようになって来た。

朝の5時に起床して6時に朝飯。そこからはずっと部屋に入り医者のようなものに検診を受け続ける。

そして昼飯を抜かして夕飯。この2つの飯は量が少ないらしい。雪風がすぐ食べ終わるのだから。

そして問題なのは夜だ。時々鈍い音が聞こえてくる。これはまあ、ちよつとした恐怖音声だ。

さて、思わぬうちに随分と揃い始めた。もうさっさと帰らせよう。訴訟準備はもう整っている。検察に立つのはこの僕だ。

その3日後、俺はその孤児院とそれを設立した政党に対して訴えを起こした。

2023年2月4日の記録

本日は晴天也。刑事裁判が起きた。訴訟内容は『政党が建てた孤児院が起こした暴力行為並びに建築した政党の任命責任への刑事訴追』

原告・検察 浅田 幸治郎

被害者 孤児院に在籍する無戸籍者複数。

被告 尾長啓司（孤児院長） その他複数の職員。

弁護士 無し

裁判記録

検察『被告の尾長以下の職員たちは被害者に暴行を加え、尾長は改善を図る事もせず黙認した。職員達は民間人であるので暴行罪の適用を求め、尾長は公の人物であるので日本国憲法第3章34条の適用を認める事を要求する。また、固定電話を使用せず営業したため、営業法への抵触が見られる』

判決 有罪。

尾長被告に懲役12年、以下職員のうち1名に殺人未遂罪が適用され一年の執行猶予

の後、懲役4年。

また、建築した政党には罰金として被害者に3000万円を払わせる確約。

浅田「いやー、きつかったきつかった。なんか裁判にしちやあつという間に終わったな」

南「僕の友が起こした訴追だ。花を添えてもいいだろう？」

浅田「……………上告だけが心配だがな。俺はもうこの2ヶ月ですつからかんだよ」

南「お疲れ、でもこれから罰金が来るだろう？それに……………」

後ろを振り向きホレ、と指を指す。そこに居るのはずっと孤児院にいた艦娘達。

彼女達を今度から、俺のマンションで預かることにした。

そちらの方が安全で、簡単だと思つたのだ。困つたらすぐ近くにある俺の家に来ればいい。

南「そーいやあの政党の党首が今度来るつてよ。ちゃんと用意しておいてね」

浅田「……………何？めんどくさ。ちゃんと謝罪でもしてくれんのかね？」

南「さあね。それよりもホラ、こんなおじさんよりもあの若い子達とお話した方がいいでしょ？じゃあね」

そう言つて南は裁判所に戻つていった。その黒コートの背中がガラス扉からその姿を消すまで見守つてから艦娘達を見やる。

浅田「さて、みんなには申し訳ない事をしたと思つている。まあ、その、なんだ。お詫びと言つては何だが俺のアパートで住んでも構わない。勿論別の所に行つてもいいが……行きたいやつは？」

手は上がらなかつた。その代わり瑞鳳の方から声が上がった。

瑞鳳「そういえば家賃とかはどうなるの？」

家賃……………家賃ねえ……………

浅田「……結構な値になるよ？」

そう言つてニヤリ、と笑う。

彼女達に緊張が走る。

浅田「まあ、ザツと見積もつて……4、5ヶ月の拘束に対する罰金分くらい……かな？」

4、5ヶ月前。彼女達が俺のアパートに来た時期、つまり彼女達が孤児院に入った期間の長さだ。つまり：・タダ。

それを彼女らが理解した時、歓声が裁判所の前で沸き起こった。

第13話

28歳、報いる方法

あの裁判が終了して一週間後。ついに明日その政治家が来ることになった。一応出来るだけ片付けはしておいてあるが、あまり畏る必要は無いので菓子折りなんぞ要らん。弁償金持つて来てからだったら考えてやる。

瑞鳳「こつち片付け終わったよ！これでいい？」

浅田「うん、ここまで来れば上出来だ。後はもう何もしなくていいや」

そう言つて畳の上に転がる。色々と疲れた。依頼も無いし今日は早く寝たい。

瑞鳳もこつちに転がつて来た。

瑞鳳「ねえ幸治郎」

浅田「どうした」

瑞鳳「何で幸治郎は探偵になろうとしたの？」

浅田「……………聞きたいか」

瑞鳳「うん」

浅田「できれば言いたくはなかったが……まあ、いいさ」

因果応報というのは、神様が勝手にやってくれる物では無い。

正義だけでは、守れないから。絶対的な悪も存在しなければ絶対的な正義も存在しない。この両者は対立する関係にあつて世の中には存在しない。絶対的な物などどうやって人が判断すればいいのか。

その悪を断つために、警察も、検察も、裁判官も、弁護士も、そして探偵もいる。だが悪を断つ存在が正義とは限らない。

昔、俺の親族はこんなことを言っていた。

『悪を見るくらいなら、好きな人を見ていたいのよ』

あの人こそ、善で正義だった。この世に生きる誰よりも優先的に幸せになるべき素晴らしい人間だった。それでも彼女は報われなかった。

それが嫌だったから、因果応報をすべきだったから。なによりも、何も出来なかったから。俺はその職業についていた。

浅田「俺は正義の味方でも無い。ただの探偵だ。お前らと会ってから口クでも無いことばかりだった。：でもお前らを引き取ったことは、微塵も後悔してない。考えてみろ、俺が褒められた行いをした事があるか？」

瑞鳳「無いね……………でもありがと。あなたはいい人だよ」

浅田「そうか？」

瑞鳳「うん。あなたは…………頭良いのにどっか抜けてる…………優しくて親しみやすい人。

あなたはそんな人」

浅田「そうかい」

白露「いっちばーん!!!」

浅田「うおっ?!」

時雨「失礼するよ。何で瑞鳳はむくれてるんだい？」

そう言つてドタバタとけたたましく入つて来たのは白露型。今の所3人いて白露、時雨、後改白露型と言うらしいが海風。今居るのは上2人だけなようだ。

浅田「おう、どうしたどうした」

時雨「これはどうやって使うんだい？」

そう言って渡して来たのはドライヤー。

浅田「これは髪を乾かす道具だな。このコードを差し込んでここを上を押すと…あ、出た出た。こうやって熱風がここから出る」

白露「すごいね、これ。お風呂とかで使うの？」

浅田「正しくは風呂上がりがりだな。濡らしちゃダメだぞ」

2人「はい」

彼女たちが退出して言ったのを見届ける。

浅田「さて、じゃあもう何もすることがないから…どうする」

瑞鳳「じゃあちよっとお出かけして来れたら許してあげる」

浅田「何を許すんだよ」

第14話

話は弾むが相性は悪い

秒針が堅実に音を鳴らし、時の流れを報せる。

その時刻がもう少しで午前11時を迎えようとしていた時、俺は玄関近くで待機していた。

瑞鳳「ねえ、本当に来るの？」

加賀「少し緊張するけどいいのかしら？」

浅田「そんな緊張するならなんでここに居るんだよ」

飛鷹「いや・・・お分りかと思いますが・・・酔っ払いがいました」

隼鷹「頭痛い・・・」

浅田「あの飲み会という名の乱痴気騒ぎか。もう2度とするなよ」

空母勢が解放祝いと言う事で飲み会を開催した。飲んだくれどもが集まりすぎて最早收拾がつかない事態にまで発展した。結局は全員が糸を切った操り人形のように眠った為深夜1時に収まった。

昨夜の出来事をそこまで思い出し、ゲンナリした時に玄関の安っぽい高音のチャイム

が鳴った。

浅田「来たな。ちよつとお前ら和室で待機。はいはい、今出ますよーつと」

空母たちを和室へと押し込ませ、玄關の薄い扉を開ける。

男「どうもこんにちは。賠償金の支払いにやつて参りました。この度はすみませんでしたね」

浅田「はじめまして、今回の抗争相手となった浅田幸治郎です。先ずは中へ」

若くして野党第1党の党首となった男、曾我 紀良がいた。

この男の名を知らない国民はおそらくいないだろう。毎日ニュースを騒がせ、その度に支持率を上げて居る。

そんな男がボロい家を3000万円をまるでティッシュユの様に片手に持ちながら訪問していた。

浅田「そうそう、本当に使えない部下持つと苦労しますよね」

曾我「ええ、もどかしいモンですよ、自分の思い通りに動かないで働き掛けがマイナスに働く部下は」

意外と話が弾んでいた。この男、南と同じかそれ以上に賢い。こんなに高度な会話を

話せる奴は久しぶり、あるいは初めてかもしれない。

その後も会話が弾み、いつの間にかもう、昼過ぎになってしまった。話した内容は大体100年後の日本の経済事情とかだ。

曾我「いや、あなた政治家になったらどうです？いい線いってますしコネ作つときますよ」

浅田「いや、遠慮しておきますよ。この職業で食つて行くと決めたモノでね」

曾我「そうですか…。それは非常に残念だ。貴方ならそこら辺の馬鹿なジイさん共よりよっぽどこの国のためになると言うのに…。」

本当に残念そうに呟いて彼は部屋を出る。だが玄関に通じる襖はそちらではない。その襖の先にいるのは。

隼鷹「んお？」

空母勢。しかも彼女達には1人の男が来る、とは伝えておいたがどんな人だとは伝えていない。

つまりどんなやつかは知らない。

隼鷹「ん？おっさん誰だ？」

龍驤「ん？こいつがその政治家やあらへんのか？」

そうだよ、そうなんだよ。分かつてるならそんな口調で話すなよ。

曾我「君達ですか。あまりフランクな口調で話さないでくれますかね？」
ボゴツとという音を立てて襖が凹む。

翔鶴「……………ッ！」

瑞鶴「ちよつと、なに人の家に金払いにきてんのに襖壊してんのよ」

曾我「…あまり怒らせるな。君たちと話せる共通の話題は存在しない」
そう言つて曾我が右手を振り上げる。

曾我「…離しなさい」

浅田「断る」

曾我の右手を掴み思い切り握りしめる。ミシミシという音を立てて曾我の腕が軋む。

その腕を振り払おうとせずに彼は笑いかけてきた。

だからこちらにも社交辞令として、笑いかけた。

浅田「オイオイ、まさかとは思うがこれ以上損害賠償を払いたいのか？」

曾我「まさか。これ以上愚弄すれば名誉毀損で300万円分捕りますよ」

浅田「おお、それは面白い！では器物損害で500万搔つ攫つてやりますよ」

アハハハハ、と笑いながら握る力は弱めない。古くなつた柱がミシリ、と音を立てて軋むのを聴きながら笑いあつた。

カツン、カツン、カツン。革靴が堅い音を響かせながらコンクリート製の床を歩いていく。今いるのは拘置所だ。

1つの牢屋の前で止まる。

尾長「お、おい！あんた！曾我さん！なんで裏切つてんだよ？あんたが経営するところだろあれは！なあ、頼むよ！早くここから出してくれ！まだあんたの役に立つからさ！」

曾我「……………私の役に立つ？」

その男は、無邪気な子供が謎に直面したかのように首を傾げた。

曾我「なぜ私が役に立って貰う必要があるのです？貴方に加担出来るほどの仕事ではありませんよ。ここで死になさい」

尾長「あんたの建物だろうがアレは……………勝手に主犯にしゃがつて！」
がしゃん、と牢屋を叩く。

曾我「クツクツク、あんた何ぞもう必要とされちゃいないんですよ。君達には分からない仕事しかないのですね」

足早に、男は立ち去る。まるでこんな不浄な所にいてたまるか、というように。牢屋の中の男は怒鳴る気力もなく、しばらく世話になるであろうコンクリートの立方体の空間を見渡した。

第15話

28歳、2人で外出する

人というものはあまり賢くはないようだ。

朝7時のニュースを見ながらそう思った。

先日の孤児院の件が報道されて2日が経った。

誰1人としてあの政党が悪いとは言わない。むしろ現政権の管理体制がなつて居ないというのだ。

別にそんな世論はどうでもいい。唯ずっと文句ばかり言い続け、何もしない頭腦の持ち主が嫌いなだけだ。きつと奴らの頭は山羊頭でその少ない脳の中に煩惱がたつぷりとつき込んであるのだろう。

光があれば、影がある。

それをまるでこの世の絶対的真理であるかの様に偽善者たちが振り回す。自分たちが光の安全無害な立場にいて、影の住人になったもの達を弾劾しながら。

弾劾されると何もできなくなる。本当に何も。人畜無害な家畜として生きるより他

には。

それで、何も出来なかったから、何も成せなかったから。何でも出来るようになるうと思つてこの職業についた。

一度だけ、前に瑞鳳になぜ探偵になつたのか聞かれたことがある。その時、こういうことを言おうとした。

だがそれはココロの中に。

彼女は彼女の荷物を背負つていて忙しい。自分のくだらない身の上話なんて二の次だ。

そんな自分語りは置いて。

浅田「で、瑞鳳。なぜ俺は君と買い物に来てるのか説明してくれよ」

瑞鳳「え？だつてケツコンしてるんだし当たり前でしょ？」

何故か瑞鳳を連れて近所の大規模商業施設に来ていた。訳分からん。ケツコンする

とそういう事をしなければならぬのか？結婚した人というのが親戚に存在しないからよく分からないのだ。ホームドラマとかも見ないし。

瑞鳳「そんな感じだよ。普通の夫婦って。ほら、早くどっか行こうよ」

浅田「あ、ああ……」

こうなればなる様になれ、と思ひ瑞鳳に任せた。

瑞鳳「うん、すごい美味しい！」

浅田「お、おう、喜んでくれた様で嬉しいよ」

凄まじい速度でアイスを口に運ぶ瑞鳳。心なしキラキラしてる様に見える。完全に無邪気な子供そのものの屈託の無い笑みで食べられるとこちらまで幸せになる。

瑞鳳「ん、幸治郎も食べりゆ？」

浅田「……………一口」

瑞鳳が運んで来たアイスを一口食べ、再び本に目を落とす。ブックカバーで覆った本に目を通す。

艦これ攻略本。

別にあまり前まで気にはなっていたが買う気は無かったのだ。だが彼女達のこともよく分からないのでちゃんと理解しようと思いついた。

鋼材と弾薬と燃料とボーキサイトで出来るってなんだ。何かの決戦兵器かよ。

一応敵みたいなのはいるんだな。流石に軍艦作ってそのまま放置、とかクソゲーなのだろう。深海棲艦？とか言うらしい。バケモノみたいな奴らだ。何で出来ているかは不明。俺も知りたい。

さて、俺は今までの話で気づくべきだったのかもしれない。艦娘という光があれば闇もあるという事に。

番外編

昔の事

深くて深い、失意の淵に、1人の少年がおりました。

少年は明日にも父と共に生まれた時から住み続けた家を離れなくてはなりません。

昔から、我慢をしていました。駄々をこねるなんてもつてのほか。何があっても父を困らせてはいけません。幸い一人っ子なので自分と父親のご飯さえ作ればよかったです。

しかし、父は引越すと暴力的になりました。頭に飲み干されたビール缶を投げつけられ、腹を蹴られ、胸を殴られました。

何度布団の中で涙を流したことでしよう。何度父に怒りを抱いたことでしよう。

しかし少年は耐えました。不平も不満も何も言わずに唯々耐え忍びながら。全ては文句を垂れてはいけないという自戒の元に。

父はアパート経営を始めました。これが大損。入居者は多い時で5人ほど。居住者のいる部屋よりも空き部屋が少なくなる、と言うことは一切ありませんでした。

父の暴行はエスカレート。入居者に心配されるほどに少年の傷は増えていきました。勿論、布団を濡らす涙の数も。

それでも少年は言うのです。

大丈夫だと。

そんな少年の唯一と言つてもいい楽しみは趣味に浸かるでした。

読書と他人の手が大好きと言う一風変わった趣味を持つていました。

そんな少年は学校から帰つてくると一人で一階の隅にある特に汚い空き部屋に入り、床下に密かに置いておいた読書に耽るのです。

現代文学、古典、百科事典、随筆、哲学。

ありとあらゆる国のありとあらゆる本を読み漁りました。

その本を読み終えて、もう一度同じ本を読み始めた時、不思議な事象が起こりました。

『落窪物語』を読んでいる時、床下に積み上がった辞典の一番上に小さな人型の半透明の生命体。しかも一人だけでなく何人も。

日常生活でもう驚く気力も無くなっていた少年は問いかけました。

少年「誰？」

ヤケクソで聞いて見たのですが驚くべき事に返事が返ってきたのです。

『ようせいさんだよ』

『げんきだしなよ』

『しょうねんよ、たいしをいだけ』

少年はそのファンタジーで、ミステリアスで、コミカルな非日常的存在に親近感を覚え、えました。妖精さんと名乗ったちっこいのも愚直に本を読みながら話しかけてくれる少年に懐きました。時々頭の上に乗ったたりして来ましたがそれすら少年には喜びでした。

少年「妖精さん。俺はここが天国みたいだよ」

妖精『わたしたちもたのしいー』

妖精『いっぱいあそべるー』

妖精「あたまふかふかー』

そんな満月の柔らかな光が夜の帳を引き裂き、街を見守る夜。

その内少年は中学校を卒業しました。少年はもつともつと学びたい、学問の先に何が
あるのか見てみたい、と思いました。

しかし父親が無理やり中学校卒業後、働かせ始めてしまいました。

少年「妖精さん妖精さん。僕は一体どうしたらいいだろう。何だかとても胸が苦し
くつていけない。お父さんに迷惑をかけたくも無いし勉強だってもっとしたいんだ」

妖精『だいじょうぶ』

妖精『われにさくあり』

妖精「ここにいつぱいほんあるー」

妖精『これでがんばればいいよ』

そう言つて妖精さんが指差したのは中学生の頃から貯め続けた本。

つまり妖精さんはそれで勉強すればいいと言うのです。

少年「そっか！俺いつか法律に詳しい人になりたいんだ！出来るかな!？」

妖精『できるよー』

妖精『がんばれー』

妖精『ふぁいとふぁいと』

きっと少年のその願いは叶えられたでしょう。

妖精さんはどの世界でも、どんな職業のものでも、悩める人間の手助けをするのです
から。

第2章 ブラック・バイト編

第16話 バイトの求人には気をつけろ

金剛「テートク！わたしバイトやってみたいネー!!!」

バン！とちやぶ台を引っ叩き金剛が叫ぶ。と言うか提督になった覚えはないのだが。

浅田「何を急に。あと俺はお前らの提督になった覚えはない」

金剛「ト・ニ・カ・ク！働いてみたいんデース!!」

再びちやぶ台を引っ叩く。ミシリ、と嫌な音が鳴る。

浅田「ちよ、分かったから落ち着けて。ちやぶ台が壊れる…。で、流石に正社員と

して雇ってもらうのは無理があるからバイトにしたと」

金剛「Yes！この前正社員になろうとして会社に押しかけたら怒られたネー」

浅田「お前何やらかしてんの!?!」

しばらく目を離していたすきになんて事を仕出かしてくれてるんだ。その社長さんには警察沙汰にして貰わなかった事に敬意を表したい。

溜息をつき、目の前の彼女を見る。おそらく彼女は本気だ。何故働きたいかはよく分

からないが。

金剛「ちゃんとオネエちゃんとして my sister 達を楽にしてあげたいん
デース！」

浅田「少し泣く」

やべえ、すごい良い子だこの子！女神か何かかよ。妹に慕われる姉の面目躍如、と
言ったところか。

金剛「と、言うわけでアルバイト try しても良いですか？」

浅田「止めたって聞かねえ癖に。いいぞ、頑張れよ」

金剛「Yes！頑張るネー！」

それから暫くした時の事。

浅田「金剛型の部屋がうるさい？」

朝潮「はい。前までは幾ら騒いでも11時前には静かにしてくれていたのですが、1
ヶ月程前からすごく夜中に生活音がするようになって」

浅田「生活音」

荒潮「ええ、何だかお湯を沸かしている様な音がして……なんかあったのかしらね

く……

満潮「とにかく！大家としてアンタにちゃんと行ってほしいのよ！」

浅田「分かった、分かったから興奮するな。暑い……………なんだろ。少し金剛型を呼んで見るか」

浅田「……とすることがあつてだな。お前らを呼んだんだが……………」

榛名「はい、どうしましたか？」

浅田「なんで件の金剛がないの？」

4つ座布団を用意したはずなのに3つしか埋まっていない。おかしいな、真つ先に乗り込んでちゃぶ台を破壊しかけて妹に止められるいつもの茶番劇を期待していたんだが。

比叡「金剛お姉様ですか？お姉様なら……」

榛名「えっと、その。なんと言いますか……」

霧島「仕事に行っています」

浅田「え、どれ位？」

榛名「朝の8時から夜の11時ごろまでですね」

浅田「あいつはいつから正社員になったって言うんだ！」

どう考えても勤務時間がバイトにしては黒い！正社員の域に突入してるぞそれ！

比叡「それを週に6日です」

榛名「時々週5日の時もありますが」

霧島「あ、あと正社員ではありませんよ。『バイト受かりましたー!!』と、喜んでいたので」

浅田「あいつ週休の罠に引っかかりやがった!!」

週休の罠。

求人広告などで『週休2日!!』等と言われているが1ヶ月、つまり4週間の全てが2日休みになる訳ではない。そうなるのは『完全週休2日』であり、『週休2日』だと1ヶ月の内、1週につき2日休みになる週が一度あればいいのだ。

詰まる所。

浅田「完全にブラックバイトだな…。仕事が増えちまったじゃねえか！」

第17話 28歳、友人を呼ぶ

浅田「んで、ここでアルバイトしていると」

やって来たのは自分も時々行く近所のスーパー。あまりブラックという印象は受けなかったのだが……。もしかして裏方の事務なのだろうか。

やはりレジを見て回ったが全くくたびれた感じは無い。

何の収穫もなしに家に帰る。

浅田「なあ、ちよつと金剛が持って来た求人広告見せてくれるか？」

比叡「あ、それならここにありますよ」

浅田「どーも・・・」

その求人広告をじっくりと見る。やはり裏方の作業のようだ。具体的には商品の仕分け。

浅田「いや、これどう見てもブラックバイトじゃん。気づかないかねー…」

瑞鳳「普通の人は分らないと思うの。はいこれお茶」

浅田「サンキュ。…ほら、色々あるんだよ。特徴として、さ」

瑞鳳「へえ、どんなの？」

浅田「例えばこの売り文句とか『明るい未来』とかそういう具体性のないモン謳ってるのは大体面倒くさい。そして体験談。これは問答無用で信用できない。ただ単に褒めるべきところが無いからこういう風にヤラセを行なっているんだ」

説明を終了し、少しため息をつく。

浅田「しやーない。あいつ呼ぶか…」

瑞鳳「え、誰？」

浅田「いや、俺の友人…。やっぱいいわ。アイツ呼ばなくて」

瑞鳳「ええ？何でえ!？」

浅田「だってアイツ…。イタイんだもん。自分も何であんなのと知り合いになったのか……………」

瑞鳳「え、イタイの？」

浅田「うん。かなりね」

瑞鳳「へえ、意外。あんまりそんな人と関わりないと思ってた」

浅田「俺も人生で関わるとは思ってなかったよ……いやに関心があるな。そんなに呼びたいのか？」

瑞鳳「うん、すごく見て見たい！」

そんなに見たいのならしようがない。可愛い嫁の願いだ。叶えてやるとしよう。

携帯の電話履歴の一番下の人物に電話をかける。

トウルルルル、という呼び出し音を右耳で聞く。

瑞鳳「眼帯とかしてるのかな……」

浅田「なんか言ったか？」

瑞鳳「ううん！何でもない！」

浅田「あー、もしも俺だけど……。うん、やめろマジで。こつちにだつて色々事情があるつての……。いや待て今すぐ行く？ま、待てよまた今度でいい……。つて……。電話切りやがったあのクソ女アアアア!!」

瑞鳳「え、女の人なの!?そういうのって男の人じゃないの!?」

雪風「しれえ！失礼します！何だか荒れてますね!!」

時津風「なにになに？なんかあつたの？」

天津風「ちよ、汗すごいわよアンタ！」

浅田「お、終わった…。早く逃げないとお前らも巻き添え食らうぞ。もしあんな奴に見つかったら…。」

ピンポン。

玄関の呼び鈴が音を立てる。

浅田「……………ヤバイ。どうやったらアイツこんな早く移動できるんだよ。とりあえず此処は居留守を使うぞ。絶対に声を立てずに…。」

『ちよーつと！浅田くん！いるんでしよう!!?早く出てこないよこのドア吹き飛ばすわよ!!?』

浅田「ちくしょう出るよ！出りゃいいんだろ!?!」

先ほどとは打って変わってドアを勢いよく開ける。その先にいたのは。

「全く…。素直じゃないんだから。あら、誰かしらあのお嬢さん方？とつてもカワイイラシイじゃない？」

警官服を着た女がいた。その自分の友人は嗜虐的な笑みを浮かべて部屋を見渡していた。

第18話

浅田君の属性はSM両用だったりする。

浅田「来なくていいと言ったのだが。このサド野郎」

女「あら、別にいいじゃない？可愛らしい女の子もいて後輩とも久しぶりに会えて一石二鳥よ。何かあったんでしよう？ここはお姉さんに頼りなさいな」

そんな恩着せがましい事をほざきながら慣れた手つきで戸棚から煎餅を取り出し食べ始める。

浅田「いやそれ俺の」

女「ま、いいじゃない。これでもあなたが撃たれた時に奔走したのよ？」

浅田「それを言われるの何も言い返せん」

痛い所を突かれる。この先輩は昔から自分が言われると嫌な所を的確に突いてくる。これが彼女の昔からの性格であり厄介な所だ。

七瀬理央。俺が中学生の時の部活の先輩だ。幽霊部員だった自分にも随分とよくし

てくれたのだが。

七瀬「あ、美味しいわねこのお煎餅。後でこれお持ち帰りしてもいい？その可愛い子たちと一緒に」

浅田「人の嫁と住人なんて事を！」

配偶者の目の前で堂々とお持ち帰り宣言する人とか初めて見たぞ。

七瀬「え、この中にお嫁さんいるの？嘘でしょ？まさか小さい子が好きなの……？」

浅田「重ねて失礼だな！」

瑞鳳「いや、大丈夫だよ。うん……」

浅田「気遣いありがとう瑞鳳。とりあえず涙拭けよ」

七瀬「あら、泣いてる顔もまた……」

浅田「はいちよつと黙っててください!!」

大の大人の大喧嘩が貧相な家に勃発した。

閑話休題。

浅田「で、何ですか。貴方の事だからそんなおふざけで来るはずは……あつた……」

七瀬「ここら辺で一回人格矯正が必要なようね？」

浅田「すみません、何でもないです」

七瀬「よろしい。それでこそ私の狗……後輩ね」

瑞鳳（今絶対狗つて言った……）

七瀬「……： 貴方、原川っていう奴がいたの覚えているかしら？」

浅田「あ、いましたねそんなヤツ」

原川「正。俺の一つ上で七瀬先輩と同級生だった人だ。昔から奇人とか変人とか呼ばれていたが何かあつたのだろうか。」

七瀬「いや、アイツ官僚になつたらしくてさ。ほら、警察と仲悪いじゃない？」

浅田「まあここだって警視庁の管轄内ですからね。官僚だつて中央に勤めてりや会う機会はあるでしょう。で、どうしたんですか」

七瀬「今官僚で何だかキナ臭い事やってるらしいのよね？」

浅田「……：。どう考えても官僚つてタマじゃないでしょうあの人」

七瀬「不思議なこともあるものよ。本当に……」

やれやれ、と言つた感じで七瀬先輩が首を振る。

まあ今はどうでも良い。気にかけることが一つ増えたただけだ。

取り敢えず俺のすべき事はその金剛の働くスーパ―に電話をかける事だ。他のことに気を揉ませるべきじゃない。

瑞鳳「……： 幸治郎は大きい方が好きなの？」

浅田「先輩イイイイ!!今すぐ謝つて下さいッ!!」

瑞鳳「あとロリコンがどうか」

浅田「待て！別にそんな訳じゃ……！」

その後の弁解は裁判時と同じレベルだったと後世の歴史学者は語る。

第19話

誘つたのは相手だからツケろ

浅田「そちらのバイトに金剛つていませんか？あぁ、そうそう。そのちよつと英語訛りの女の子なんですがね……。そうですそうです。茶髪の……。それでその子についてお話があるんですがね」

金剛「なんの電話デース？」

瑞鳳「あのアルバイトの話らしいよ？」

浅田「はいはい。労働環境なんですがね……。ちよつと聞いたんですよ。そうそう。金剛に。で、少しお話があるんですけれども。え？何？忙しいから無理？はははっ！何言つちやつてるんですか店長！あなたが忙しい訳が無いでしょう！まあ、尤も貴方の下で働いている人がどうかは分かりませんがね……。え？はいはい。了解です」

ガチャン、と電話を切り、ため息をついてから浅田が悪態をつき始める。この男、あ

まり心を許していない人間へは意外と口が悪い。

浅田「クソツタレが。忙しい訳無えだろ下に仕事任せてるんだし。そもそも何が『じゃあせめてご飯でも』だ。割り勘とか言ったらはっ倒してやる」

金剛「あ、あの… 本当に大丈夫ですか？」

瑞鳳「ど、どうなんだろう？」

後日。

浅田は言われた通りの時間、言われた通りの場所に来ていた。

雪風、天津風、時津風を引き連れて。

雪風「なんで雪風達がついて行くのですか？」

浅田「本人を連れてくるわけにはいかないだろ。それにお前ら聞いてた癖に何もしてなかったんだからこれくらいは手伝え。なんか食って良いから」

時津風「やったー！」

天津風「え？でもアンタお金…」

店長「はじめまして。私、高橋啓司と言います」

浅田「どーも」

近所のファミレスで28のおじさんに片足突っ込んだお兄さんと前頭部の禿げ上がったおじさんが対談していた。

おじさんは秘書らしき若い男、もう片方は3人パフェを食べている子供を連れてくる。

高橋「それで？私たちの会社の雇用環境が劣悪だと？あなたはそう言いたいのですか？」

浅田「それを言いに来たんだろーが。用件ぐらい頭に入れておけよ」

営業スマイルを浮かべるハゲに対して不敵な笑みを浮かべるおじさん。

高橋「……ま、まあそれは分かっていますよ。確認ですよ、確認。で、お言葉ですがあなたの思い込みでは無いですか？金剛さんだって飲み会とか言って遅くなってるのかも知れませんか」

浅田「アイツは紅茶だよバーカ。そんなことも把握してないで何が店長だ、厚かまし

い」

どんどん不機嫌になって行くハゲと不敵な笑みを深めるおじさん。

浅田「全く……とりあえずこのままだと金剛から話聞いて訴えちゃうけど良いの？ 今なら示談で済ませてやるかもよ？」

高橋「……敬語を知らない様な人間に負ける訳が無いだろう？」

浅田「最初から敬うに値する人間じゃ無いからね」

隣では一心不乱にパフエにがつつく3人。もう少して食べ終わりそうだ。

浅田「ま、これは忠告って事にしておくけれどさ。悪い事してると痛い目見るぜハゲオヤジ」

高橋「……少しよろしく無い発言ですね」

浅田「おーおー、怒っちゃった。こいつらもパフエ食い終わったし逃げよーつと……ほら行こうか3人とも」

雪風「ええ、もう行つちやうんですか？」

浅田「もうお前ら全部食ったろが。行くぞホラ」

浅田「あ、店員さん！代金あの人達が払ってくれるんで！」

天津風「アンタエグい事言うわね!？」

第20話

閃光

浅田「で、何しに来た」

土曜日の昼下がりに。俺は来訪者を仕事用の椅子に腰掛けながら見下ろしていた。

浅田「高橋さん」

話は数日前に遡る。俺は金剛を伝にして従業員数人に集まってもらった。

浅田「とりあえず、だ。話があるんだけどね。何で……」

従業員「労基署に行かないか、ですか？」

浅田「あら、話が早い」

従業員「昔そういう方が同じ質問をされたもので」

ふーん、と呟きながらその同業者に想いを馳せる。訴えただろうにこの体制が今でも

続いているという事はあまり腕のいいヤツじゃなかったんだろな、と考えを巡らせた。

だが自分はその程度ではない。やるなら生殺し。この世界で実践を積み重ね続けるとどこまで追求すべきか、どこで手を止めるかの塩梅が分かってくる。

今回は裁判に持ち込む話じゃない。事前に和解金を持ってこさせれば済む話。

と、言うわけでこのままだと30万円一人ずつに払う羽目になるが今なら10万円にしておく、と言う通告書を送っておいた。

そのまま払ってくれたならよし、払わないのなら徹底的に潰す、と思っていたのだが今回は前者だったようだ。

高橋「あのー…すみませんでした」

浅田「いや、俺じゃねーだろ謝んのは。ほら、行ってこい」

従業員のいる部屋に問答無用でぶち込んだ。

その後の怒声がなかなか汚いものだったが気にしない。接客業に携わる人間とは思えないほど汚かったが気にしない。

金剛「スッキリしたデース」

浅田「物理的に？」

金剛「いや、Heartデスヨ」

浅田「そいつは良かった」

そう行つて一息ついてから茶を啜つた。

とある国、とある沿岸部にて。

『大佐。我が国の領域に国籍不明の船舶が突如出現しました、どうしましょうか』

『沈めろ。我が国の領土の侵犯は許されん』

『はっ！』

『……』

『どうした？』

『…… しません』

『は？』

『敵艦が…… 撃沈しません……！』

『爆撃です！敵艦が攻撃を開始して来ました！』

『…… 国連に応援を要請しろ！それまで砲弾を撃ち込め』

『了解しました。海を監視して来ます』

そう言って将官は一人、基地を出る。その“敵艦”が、異形とも、人類の今後1000年の災厄になるとも知れず。

その哀れな一人の将官は確かに見た。砲撃の中、自らに向けられた閃光。

浅田「へーえ、ずいぶん珍しい来客じゃん」

曾我「そんなに珍しいかい？」

浅田「普通なら議員が来る家じゃねえからな、ここ。ファミレスのパフェ3つでも奢らせるような貧乏人の家だ」

曾我「何だいそれは……。まあそれよりも大切な話があるんだ。少しばかり協力を要請したい」

最終章

第21話

話を蹴るか話者を蹴るか

浅田「協力を要請？お前に出来ないことなんぞそうそう無いだろう」

曾我「お褒めに預かり光栄だね。でも起きちゃったんだな、それが」

そう言つて曾我は懐から小さな世界地図とボールペンを取り出した。その赤いボールペンで世界地図の中の一点、中東のペルシヤ湾沿岸の北部を小さく赤く染める。

曾我「この事は関係者以外には言っていないのだが君を見込んでの話だ。聞いてくれ。つい2日前だがここの国の沿岸部が何処かの艦隊に襲撃され、壊滅した」

そんなぶつ飛んだ話を聞かされて目を見開く。と言つてもあまり内心驚いてはいなかった。あまりにも突飛すぎて現実味を帯びないのだ。

浅田「んな事言われてもな……。本当だとしたら大変な話だろ。石油なんてどうするんだ」

曾我「ああ、だから困っているんだ。1ヶ月後には最悪石油輸入量が半減する」

浅田「今まで以上に享楽主義になって石油の使用量が増えた現代日本においては命取り……つて所か」

曾我「そういう事だ。と言うわけで君の協力を仰ぎたいんだが……」

瑞鳳「ど、どうする？ 国が困っちゃうなら助けた方が……」

浅田「断る」

曾我「……理由」

浅田「まず第一に、だ。あの翔鶴への一件で分かった。お前は邪悪だ。手は貸したく無い。第二に国が困ってるから助けるなんてのは英雄様のやる事だろ。俺は守つてもらう側の人間だよ」

そう締めくくってから煎餅に手を伸ばす。それを掴み、包装を破きかけたところで曾我が口を開いた。

曾我「確かに君はただの探偵だ。だが君には他には無い力がある。それを借りたいと

思うのは間違つてるか？」

浅田「なるほど合理的だ。だがその相手が拒否をしているのだ。それでも使うのは非人道的では無いか？」

曾我「非人道的なものだ。国家というものは」

瑞鳳「でも！道理が通らないよ!？」

瑞鳳が口を挟む。個人的に意外な横槍だったのだが曾我はそれにもすぐに対応する。

曾我「一々道理を通しては支配が及ばん。それが政府というものだ」

瑞鳳「そんなあ・・・」

浅田「・・・よし。ある条件下ならお前の話を飲もう」

曾我「ふむ。聞こう」

浅田「第一にこの全権は俺に委ねる事。第二にこの契約を絶対に国民にバレないようにする事」

曾我「善処する。一体なんのつもりだかは知らんが・・・まあ君なら国を獲つたりはしないかな？」

浅田「・・・さあな」

曾我「何だい？今の空白。まあいいや。もう必要なさそうだからその猫回収しとく

ね」

そう言つて窓際にいるウチの黒猫に手を伸ばす。

浅田「いや、待て待て待て。何自然にウチの飼い猫連れてこうとしてんだ」

瑞鳳「幸治郎。やっぱりこの話なかつた事にしようよ」

浅田「お前そんなにこの猫と仲よかつたわけ」

曾我「えー、でもな……。こいつロボットだぜ」

瑞鳳「……え？」

第22話

みんなの事

浅田「いや嘘だろお前流石に冗談キツイぞ」

曾我「いやいや本当なんだって。これ実はお前ら監視するために用意したスパイロボットなんだわ」

瑞鳳「いやいやいや、ちゃんと猫だったでしょ?」

曾我「いやいやいやいや、凄く精巧に作ったんだわ、これ。これをスパイにする引き換えにあの君の友人は開放したから。なんて言っただけ……井上?」

浅田「あー! アイツだから全然話してこなかったのか! じゃねえよ何市民監禁してんだ」

曾我「いや、大丈夫。アフターケア万全だから」

浅田「あっそう」

瑞鳳「やけにアツサリだね」

だつて大丈夫だろ、と思ひながら

浅田「で? 早く要件を言えよ、そんな生ぬるい話し合いのために来たんじゃないだろ。」

もつと話を進めろ」

曾我「バレルよなあ。とりあえず話としてはお前には艦娘を率いてほしい」

浅田「や。だ。」

瑞鳳「ええ!?!なんでなんで!?!幸治郎絶対素質あるよ提督の!」

浅田「ヤダね絶対やらないぞ!もうちよつと性格のいい奴がやる奴だろ!死んでもやらん!」

結局曾我に怒鳴られたので渋々引き受けた。だって時の人に逆らうと晒されるし。

浅田「そう言えばさ、その深海棲艦って何の問題がある?ただ侵略するだけか?」

曾我「雨が降る」

浅田「は?」

曾我「三日おきに赤い雨が降る。ちなみにこの雨は強酸性らしくて人体に触れると肌が溶けて作物も育たない」

浅田「今すぐ倒すぞソイツら」

浅田「とりあえずこことは暫くお別れだな」

そう言つて事務所の片付けをしていた。人生の大半の時間をここで過ごした。自分という人間は床下の読書始まつていたのだろうな、と思う。では自分が終わるのは何処だろう、と思いを巡らせる。

願わくば。

浅田「畳の上で死にたいな……」

そう言つて書類整理を再び始める。そう言えば艦娘というのは人間に比べて寿命が長いようだ。出来れば艦娘には正しい死に方をしてほしい。多分だけど、まだ見たこともないけど、化け物と戦わされて死ぬのは間違つてる。

きっと死んだ後に他人が『あの人は幸せだった』と言えればそれは胸が張れる死に方だ。

でもそれまでは。

浅田「……面倒臭がらず行くか」

そんな風に呟いて床下を覗き込む。

そこにあつたのは積み重なった本ではなく。

小さな空飛ぶ人。

その小さな不思議な生命はこちらに気がつくとき小さく微笑んだ。

その後、なんか黒いのは想定外のスピードで日本に攻め入って来た。と、言うよりアメリカ、ヨーロッパ、中国、朝鮮半島、ロシアにも。

とにかくこの共通点は『第二次世界大戦に参加した国である』という事。

瑞鳳「ねえ幸治郎」

浅田「どうした」

瑞鳳「この戦争どれくらいまで続くと思う？」

浅田「分からん、でも俺たちの孫の代には終わらせたいな」

瑞鳳「孫まで？そんなにすぐ終わるかな？」

浅田「今の世代の提督は皆優秀だ。でも全員がそのスキルを子供に継承させるとは考えにくい。戦死者だって少なからず出るわけだし。だからまだ孫までなら人材は残ると思う」

瑞鳳「ふーん……。そっか」

浅田「……まあでもその為にはちゃんと次の世代に伝えるのが重要であつてだな」

そう言つて目の前にある書類をほつぽり出して瑞鳳の隣に座る。

その柔らかい腹を突いてこう言つた。

浅田「どうだ。次の世代……作つてみねえか？」